

KAPPA BOOKS

万葉恋歌

日本人にとって「愛する」とは

永井路子



KAPPA BOOKS



万葉恋歌

日本人にとって「愛する」とは

なが い みち こ
永井路子

光文社

カッパ・ブックス



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども

ます。庫

（郵便番号112）

光文社 出版局

万葉恋歌

日本人にとって「愛する」とは

昭和47年6月25日 初版発行

昭和49年5月31日 27版発行

著者 ^{なが}永 ^い井 ^{みち}路 ^こ子
神奈川県鎌倉市鎌倉山若松

発行者 五十嵐 勝 彌

印刷者 堀内 文 治 郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2
振替東京115347

株式会社 光文社
電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。〔明泉堂製本〕
表紙の模様・意匠登録 116613 © Mitiko Nagai 1972

(分)0-2-92(製)00292(出)2271 (0)

KAPPA BOOKS



万葉恋歌

日本人にとって「愛する」とは

なが い みち こ
永井路子

光文社

カッパ・ブックス

まえがき

千数百年まえに生まれながら、「万葉集」は、日本の古典の中で、もっとも若々しい古典である。それはなぜか。「愛」というものの原型が、きわめて大胆に投げだされているからだ。全編にあふれる目くるめくばかりの愛のきらめきは、時として人を戸惑^{とまど}わせる。じつは私自身も、かつて、その扉を押しあけ、そのまぶしさに立ちすくんだ一人なのである。

旧制女学校の二、三年生ごろだったと思う。新任の若い男の先生が来て、第一回の歴史の授業のとき、大きな字で黒板いっぱい^{かきのものひとまろ}に柿^{かき}本人^{ものひと}磨^{まろ}の歌を書いた。

・東^{ひがし}の野^のにかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ 「巻一・四八」 柿^{かき}本人^{ものひと}磨^{まろ}
いい歌だろう、そうじゃないか、じつにいい歌だな、と言われた。私が家へ帰って「万葉集」なるものをひろげてみようという気になったのは、白状すれば歌そのものよりも、その若い男の先生への関心からだったのだが、ページを開いてみて、どきりとした。

そこにもかしこにも、みずみずしい愛の息吹きがあり、率直すぎるほど率直な欲望の告白があった。まるで素裸で立ちほだかる愛の女神と向きあって、目のやり場にもこまる感じだった。それでいて、私はひそかに吐息をついていた。

——愛とは、こんなにすばらしいものなのか。

十四、五歳の私は、その時、愛とは何かをほとんど知ってはいなかった。たかだか翻訳小説をかじりかけて知っていたものを、改めて別の世界から照明をあてられたような気がした。

生きるということはすばらしいことなのだ、ということをして「万葉集」から教わったといってもいい。それまで教科書や何かで『徒然草』や『平家物語』は読まされていたが、こんなふう之魂をゆすぶられ、とりつかれるように読んだ古典は、これが初めてだった。

といっても、中学程度の学力で、全部の歌がわかるはずがない。わかるところだけ、とぼしとばしして読んだ。「万葉集」は、こうした身勝手な読み方のできる古典で、それが魅力の一つだった。『源氏物語』などでは、とうていこんなことはできない。中でもいちばん心をひかれたのは、恋の歌だった。小娘の私にも、参考書なしでぱっと理解し得た歌には、こんなものがある。

・今更いまさらに何をなにか思おもはむうちなびき心は君によりにしものを「巻四・五〇五」 安倍女郎あべのいらつめ

この激しさ——。大きくなって恋をしたらこんな歌を相手に捧ささげたい——いや、こんな歌を捧げるような恋をするんだ、と心にきめてノートに書きつけた。

歌の意味はよくわからないが、調子がいいので憶おぼえてしまった歌もある。

・我が戀あはまさかも悲しくさまくら多胡たこの入野いりののおくもかなしも「巻十四・三四〇三」 作者不詳
私の恋は現在も切ないし、行く末の見込みもない切ないものなのだ、というような意味もわか

らないままに、私は、「まさかも悲し」という哀切なひびきに魅せられた。

「万葉集」は、そうした読み方もできる古典である。わからなくても口ずさんでいるうちになんとなくわかってくる。それは、この歌集の中のほとんどが短歌というきわめて短い、憶えやすい抒情詩であるからであろう。これも「万葉集」の大きな、見のがせない魅力である。文学の出发点に、こうしたふしぎな魅力をたたえた古典を持つ私たちはしあわせだと思う。

私も、このふしぎな魅力にとりつかれて「万葉集」を読み始めて、いつのまにか三十年たった。万葉学者でない私の読み方は、少女の日のその延長にすぎないが、ここに「万葉集」との対話のあとを辿って、もう一度愛の原型をさぐってみたい。

巷には今、「愛」があふれている。歌は愛を歌い、活字は恋を愛をと押しつけてくる。それでいて、現代ぐらい愛の不毛の時代もないといわれている今、もう一度古典の川を溯って愛の原型をたしかめてみるのは、意味のないことではない、と思うからである。

最後にテキストとしては、『日本古典全書』（朝日新聞社版）を使わせていただいたことを記して御礼を申し上げる。

昭和四十七年六月五日

永井路子

目次

まえがき	3
プロローグ——日本人の愛の原型	9
一 片 恋	21
二 ひと目見し人	33
三 ひめぐと	48
四 悦 よろこ びを謳 うた う	65

五 待 っ……………	87
六 別れてある時も……………	105
七 夫と妻……………	129
八 人妻ゆえに……………	149
九 悲しき恋の物語……………	164
十 万葉の恋愛美学……………	185
和歌索引……………	223

本文さし絵・川田幹

プロローグ——日本人の愛の原型

ふつう「古典入門」の場合、その古典が、どんなもので、いつできて、だれが書いたものか、それについての諸説などをわかりやすく紹介することから始まるようだが、私はあえてそれをおこうと思う。

この本は、「万葉集」を知るためのものではなくて、万葉の世界を肌で感じるためのものだからだ。その中に四千四百五十一首あろうと四千四百五十首しかなかろうと、さしあたって私たちには関係がない。また、この歌集がどんなふうになつたか、どんな性格のものかについては、多くの学者が長い間かかって議論してはいるが、まだぜったいこうだという定説もない。が、このいちいちについて吟味するのも、いまの私たちにとってはさしあたっては必要はないだろうし、いちいちの作品にふれてゆく間に、その問題は、おのずから浮かび上がってくるのではないかと思う。

ではいま、万葉の世界に旅立つにあたって、ぜひとも知っていなければならぬことはあるだろうか。それはほとんどない、と私は思う。詩を味わうのに理屈はいらないからだ。まあ知って

おいてもいいと思うのは、この歌集がほぼ千二百年ぐらいまえに作られたものだ、ということぐらだろうか。

一般に奈良時代と呼ばれているそのころが、どんな時代だったかということも、ここでくたぐだしく解説する必要もないと思う。ただ千二百年という長さにうんざりし、まるで別の世界だと思ってしまうとおられるかたがたのためにちょっと付け加えると、そこに生きた男女は、心情や生活様式において、それよりあとの時代の人びとよりも、むしろ現代人に近い一面をもっていた、ということだ。

まず、彼らは牛乳も飲んだし、チーズの味も知っていた。もっとも当時としてはかなり高級品で、一般庶民の口にははいらなかったかもしれないが。そのほか、卵や肉も喜んで食べた。四つ足——すなわち動物の肉を嫌うようになったのは、むしろ、そのあとである。

女は髪を上げ、スカートと上着のツーピースを着、腕や髪にアクセサリーをつけた。領巾ひしめという名のロング・ストールも持っていた。髪がおすべらかしになり、衣裳がいわゆる十二単ひとえ（裳・唐衣からぎぬ・装束）になるのは、そのあとの平安時代である。このとき下につけた小袖こそでがのちに上着になって、今の着物と帯の姿ができあがり、日本の女性はツーピース姿に別れを告げてしまうのだが、奈良時代は、まだまだツーピースの時代だった。それも今でいうマキシのスカートである。これにアクセサリーをじゃらじゃらつけ、ロング・ストールを巻いていたのだから、ある意味では現

代そっくりでもある。

もちろん現代のように、ものが豊かでなかったから、庶民の生活は貧しかったが、一部の上流階級は椅子の生活で、寝るときはベッドで寝た。これもその後の生活にはなかったことで、その意味では、椅子とベッドの生活は、この時代と現代だけだ、といってもいい。

それにもう一つ、たいへん現代と似ていると思われるのは、万葉の時代が外国文化の影響を強く受けた時代だということだろう。もっとも、そのころの外国というのは、アメリカやヨーロッパではなく中国だったが、いまあげてきた生活様式なども、つまりは中国スタイルをお手本にしたものだったのである。

が、こんなふうに外国文化の影響を受けることを、一概に猿まねだと言いすてることはできないと思う。歴史を振り返ってみて、日本が活気に満ち、いきいきとした文化の花を咲かせるのは、こんなふう在意欲的に外国文化の流れとぶつかり合ったときが多いからだ。そして「万葉集」の中にあふれる生命力の豊かさも、けっしてこうした時代の背景とは無縁ではないはずである。――さてこうしてみると、「万葉集」のはぐくまれた風土は、あんがい、今の私たちにあって、別の世界ではないようだ。もちろん、社会の仕組みや結婚の形態などはずいぶん違っているが、そんなことも、一つ一つの歌にぶつかってから考えていいことである。

なんといっても、私たちが訪ねようとしているのは、愛の世界である。男が女を、女が男を愛

するということに、理屈や時代の差はないはずだし、とりわけ「万葉」の愛の歌は、そのものずばりといつていいくらい、あけすけで正直なのである。

これがのちの時代の愛の歌となると、そうはいかない。ひとひねりもふたひねりもしてあったり、えらい学をひけらかしていたりして、歌ったご本人はご自慢なのだろうが、それだけ愛の感動は薄められてしまっている。が、「万葉」の場合は違う。

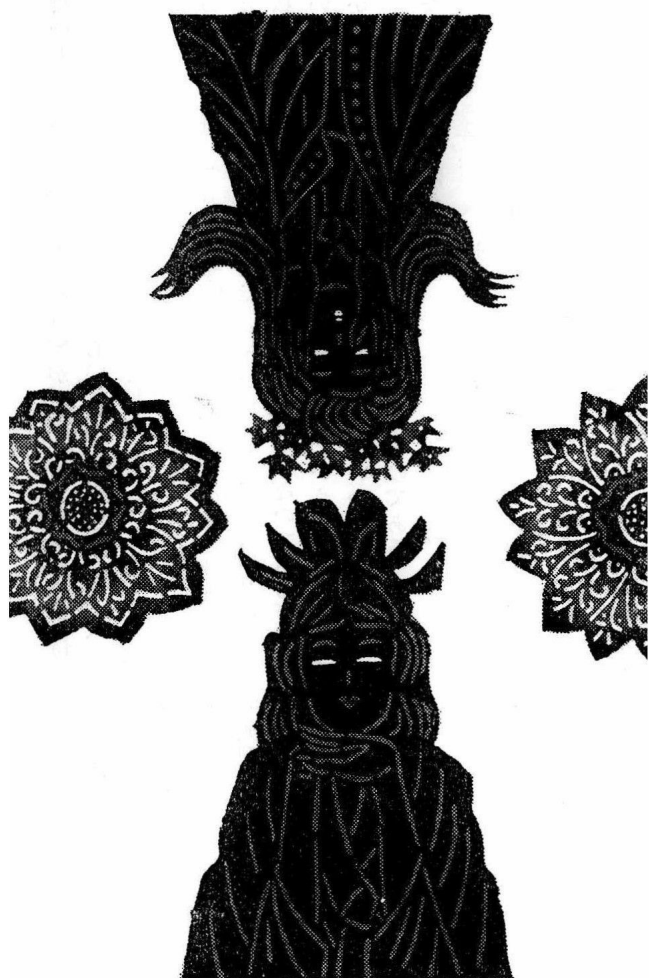
「ぼく、きみを好きなんだ。」ずばりそういつて、じつと相手の瞳をのぞき込んでいるような歌が多いのだ。そして、愛の告白というものは、せんじつめてしまえば、ここに戻ってくる。いかにさまざまな言い回しがあるにしても、これ以上強烈な愛の告白はないのである。

が、それでいて、その言葉はけっしていやらしくもなければ、無趣味なものでもない。それはなぜか。その歌の一つ一つが、みごとに抒情の世界を作りあげているからだ。後世のだれひとり及びもつかない、美のきわまりともいふべき世界を……。

たとえていうなら、「万葉」の世界はギリシア彫刻の世界であろう。ヴィーナスの彫刻を見た人は、だれでもためいきをつかずにはいられないだろう。

「あんな美しいものが、数千年も昔によくも作れたものだ。」

後世の人がそれと同じものを作ろうとしても、もうできない。たとえてきたとしても、それはすでに模倣にしかすぎない。かくもみごとに作りあげられた美の典型に向かって、人間はさまざま



ま挑戦してきた。が、何人の彫刻家が、ギリシア彫刻を超え得たろうか。ミケランジェロ、ロダ
……。たしかに、彼らはすばらしい作品を残しはした。が、全世界の作品を並べて、これらの
中からたった一つだけおまえにやると言われたら、やはり人は、ギリシア彫刻に手を伸ばすの
はないだろうか。

「万葉集」には、（こ）超うした美しさがある。のちの世の歌人たちが超えようとして超えられない美
しさであり、またある意味では、後世ではぜったいに創り得ない美の典型が、そこにはある。そし
て私がここで語りたいのは、じつはこの美しさなのである。短歌形式で比較的わかりやすいから、
といった便宜的な意味で古典入門に使おうというのではけっしてない。日本人の心のかたち、愛
のかたちがどんなものか。いわば愛の原型といったものを考えるとき、「万葉集」を抜きにして
は、何も考えられないからこそ、とりあげるのである。

たとえばこんな歌がある。

＊

多摩川（たまたが）にさらすてづくりさらさらに何ぞこの

兒（こ）のここだかなしき
〔巻十四・三三七三〕 作者不詳

これは、武蔵国（むさしのくに）（今の東京都、埼玉県などのあたり）の歌だという。作った人もわからない、言っ